

安岡 章太郎(やすおか・しょうたろう)

1、プロフィール

小説家。1953年「悪い仲間」「陰気な愉しみ」で芥川賞を受賞した、「第三の新人」の一人。穏やかな筆致ながら戦中世代の強さを貫き、日本藝術院会員、文化功労者に選ばれている。

<生没>

1920(大正9)年5月30日～ 2013(平成25)年1月26日

<代表作>

「悪い仲間」「陰気な愉しみ」(両作品で芥川賞受賞)、『海辺の光景』(芸術選奨・野間文芸賞)、『幕が下りてから』(毎日出版文化賞)、『走れトマホーク』(読売文学賞小説賞)、『流離譚』(日本文学大賞)、『僕の昭和史』(野間文芸賞)、『伯父の墓地』(川端康成文学賞)、『果てもない道中記』(読売文学賞随筆・紀行賞)、『鏡川』(大佛次郎賞)など。

<青森との関わり>

1929年(昭和4)からほぼ2年間、弘前市在住。当初は新富田町、後に松森町に住み、第二大成小学校に通った。

2、作家解説

小説家。1920年(大正9)高知市生まれ。

陸軍獣医であった父の勤務地を転々とし、朝鮮の京城(現韓国ソウル)で小学校入学。29年(昭和4)父の第八師団への転勤に伴い、小学3年生から4年生までのほぼ2年間、弘前で暮らした。その後東京に移り、東京市立第一中学校(現都立九段高校)を経て、浪人3年後慶應義塾大学文学部予科に入学(戦後、同大学英文科を卒業)。在学中の44年(昭和19)召集により満州に赴くが、胸部疾患を患い内地送還される。その後脊椎カリエスに苦しみながら、創作を続けた。

53年(昭和28)「悪い仲間」「陰気な愉しみ」の二作で第29回芥川賞受賞。同時期に文壇に登場した吉行淳之介、遠藤周作、阿川弘之らと共に「第三の新人」と呼ばれ、エッセーや対談でも活躍。批評家としても評価が高く、芥川賞、大佛次郎賞、伊藤整文学賞の選考委員を務めた。また学校国語教科書に「サーカスの馬」が採用されている。度重なる転校や成績・素行不良の自らの少年時代など、身边を淡々と描く私小説的作品が多いが、やがて歴史に題材をとった長編小説にも意欲的に取り組んだ。

「弘前は意外に書きにくい町だ」と記したのは、「暗さのなかの明るさ 弘前」(『晴れた空曇った顔』2003年幻戯書房)。若き長部日出雄氏が〇さんとして登場するのは、「失われた故郷—太宰治」(『人生の隣』1975年講談社)である。他にも「やり・へら・にっこ」(『自叙伝旅行』73年文藝春秋)、「球の行方」(『走れトマホーク』73年講談社)、『現代の随想 方言の感傷』(78年日本書籍)、『僕の昭和史①』(84年講談社)、「まぼろしの生徒」(『酒屋へ三里 豆腐屋へ二里』90年福武書店)などに、弘前が登場する。

76年(昭和51)日本藝術院賞受賞、日本藝術院会員に推される。88年(昭和63)遠藤周作を代父としてカトリックの洗礼を受ける。2001年(平成13)文化功労者。

13年(平成25)老衰により死去。享年92。

3、資料紹介

○『流離譚』

図書

1981(昭和56)年12月15日

215mm×150mm

安岡家は土佐藩郷士の家系で、父の生家の蔵に埋もれていた古い日記、覚え書や手紙などをもとに、幕末の安岡家の人々を中心に描いた長編歴史小説。「新潮」に1976年(昭和51)3月号から81年(同56)4月号までの5年間連載した。日本文学大賞受賞。